JIC インフォメーション

第209号 2020 年 10 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC 国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp

東京オフィス:〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪・ロシア留学デスク:〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリーズビル 7 階　TEL:06-6944-2341

ロシア・旧ソ連 国際交流誌

Russian Culture Festival in Osaka

写真／大阪のロシア･フェスティバル(9 月 26 日)。ダンスチーム「カチューシャ」の皆さん、屋台でのロシアグッズ販売など(9 頁)。

http://www.jic-web.co.jp

コロナ下での日ロ交流～オンラインイベント報告など･････2P
≪本の紹介≫「日ソ戦争 1945 年 8 月」･････････････････5P
「ロマノフ王朝の日露交流」「私の音楽留学」
「2 時間で逢える日本 - ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ」････西川 洋･･･6P
≪ロシア映画情報≫
ロズニッツア＜群衆＞ドキュンメンタリー３選、など････8P
≪報告≫大阪ロシア・フェスティバル････小原 浩子･････9P
キルギスで日本語を教える（2）
日本人として伝えたいこと･････････倉谷 恵子･･････10P
≪連載≫シベリアの愛（3）･････････････稲塚 俊介･･････13P
ロシア映画祭 ＜繋がるご縁＞･････････田島瑠采奈･････15P
大人も子どもも楽しめるロシアの絵本･････････････････19P

JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

新型コロナで「巣ごもり生活」が続く中、大勢の人が集まるコンサートやイベントが開催しにくくなり、日ロ交流活動にも様々な影響が出ています。ロシア文化フェスティバルのオープニング・コンサートはアーティストたちが来日できないため 6 月から 9 月、10 月へと延期・変更され、いまだ開催の目途が立っていません。JIC が実行委員会事務局を務める「ロシア映画祭 in 東京」もロシア側から連絡がなく、今年は開催できそうにありません。

このような中で少しでも日ロ交流の輪を広げようと、オンラインでの講演会やセミナーがこの夏以降、活発に企画されるようになっています。以下、最近開催されたオンライン・イベントを中心にいくつか報告します。（編集部）

コロナ下での日ロ交流活動

オンラインイベントが中心に

「日露美術工芸とマトリョーシカ研究会」オンライン講演会

「日露美術工芸とマトリョーシカ研究会」の第 1 回研究会が 8 月 22 日に開催され、慶應義塾大学の熊野谷葉子先生が「マトリョーシカ日本起源説をめぐって」と題して講演しました。マトリョーシカは、19 世紀末にモスクワ郊外のアブラムツェヴォ村に住むマーモントヴァ夫人が考案し、1900 年のパリ万博に出品されて大評判になり、ロシアを代表する民芸品になったわけですが、そのアイデアの源は日本の七福神の入れ子人形とも、ロシア正教の復活祭のイースターエッグとも言われています。熊野谷先生は、「日本の入れ子人形がマトリョーシカの元になったという明確な史料（証拠）は見つからないけれど、なぜそういう話が出てきたのか調べていくと、19 世紀後半から 20 世紀にかけてロシアで資本主義が発展していく過程で、ロシアの実業家が世界中の多くの民芸品を収集していたこと、これらを参考にロシアの民芸品に改良を加えていったことがわかってきた。木材を正確にくり抜く高度なろくろ技術が当時のロシアにあったことも見逃せない」と、史料をあげながら話をされました。

第 2 回研究会（9 月 22 日）は「ロシアの工芸とジャポニズム」のテーマで上野理恵先生（慶應義塾大学）の講演でした。ジャポニズムというのは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて西ヨーロッパで流行した「日本趣味」ですが、ロシアにはやや遅く 19 世紀末から西欧を介してジャポニズムが入ったと言われています。ロシアでも日本美術のコレクターが登場し、彼らのコレクション展がモスクワやペテルブルグで開催され、屏風、扇、花瓶、人形などの日本風の工芸品が室内装飾としてもてはやされたようです。しかし、中国の工芸品と一緒に見られたり、また「ロシア様式」の影響下で「ロシア的なもの」と一体化したりして、ロシアの工芸においてジャポニズムは見えにくくなっているというお話でした。

この研究会はもともと、今年 6 月にロシア国立セルギエフ・ポサード歴史藝術博物館の S・ゴロジャーニナ美術工芸部長を日本に招いてシンポジウムが計画されていたのが新型コロナで延期となり、その代替案として企画されたもので、まだ今後も続きそうです。

（問合せは熊野谷先生へ：kumanoya@keio.jp）

「もっとロシアを知ろう！」ロシア大使館がオンラインセミナー

主に旅行会社や通信社、ロシアに関心のある若者にロシアの観光魅力を伝えるオンラインセミナーが、在日ロシア大使館とロシア連邦文化科学協力庁駐日代表部の主催で 7 月から月 1 回のペースで開催されています。1 回目（7 月 22 日）はボルガ川沿いの町・サラトフ、2 回目（8 月 18 日）はアルハンゲリスク州の紹介がありました。

アルハンゲリスクは北の白海に面したロシア最初の港町で、18 世紀初めにペテルブルグが建設されるまでロシアの唯一の対外貿易港でした。ピョートル大帝によってロシア最初

アルハンゲリスク州 木造建築の教会

ウリヤノフス 民間航空博物館

の造船所が作られたのもこの町です。州内には古い教会や民家がたくさん残っており、それらを集めた木造建築物博物館には多くの観光客が訪れます。ユネスコ世界遺産に登録されているソロヴェツキー修道院（1429 年建立）があるソロヴェツキー諸島も州内の重要な観光地です。

第 3 回目（9 月 29 日）ではロシア革命の指導者レーニンの生まれ故郷であるウリヤノフスク（旧名;シンビルスク）の紹介がありました。首都モスクワの東 900km、ボルガ川の水運に恵まれたウリヤノフスクは自動車や航空機産業、機械産業などが発達した工業都市で、日本からはブリジストンが工場進出しています。ソ連時代からの航空機 40 機以上を展示する民間航空博物館とボルガ川に架かる 30km 以上もの長い橋を見てみたいものです。モスクワから、カザン～ウリヤノフスク～サマーラなどボルガ川沿いの町をめぐる旅を考えてみるのも面白いと思います。

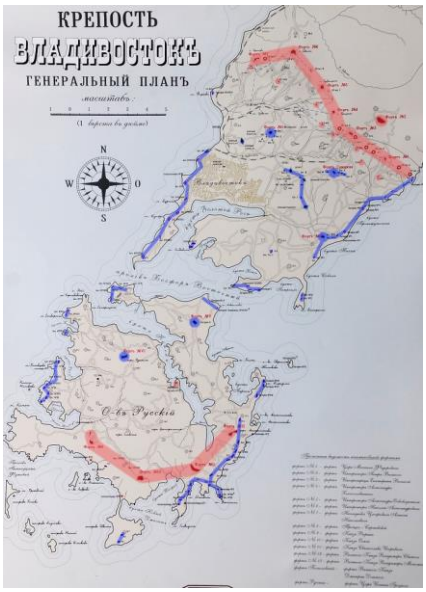
問合先；ロシア連邦文化科学協力庁駐日代表部

E-mail：japan@rs.gov.ru

日本ウラジオストク協会の懇談サロン ウラジオストクの要塞めぐり

日本ウラジオストク協会（中本信幸会長）のオンライン懇談サロンが 9 月 22 日に開かれ、同協会副事務局長の田代紀子さん（ロシア語通訳）を講師に、ウラジオストクの要塞を巡るバーチャルツアー（映像の旅）が行われました。

1860 年の北京条約でアムール川北部とウスリー川東部を中国（清国）から獲得したロシア帝国は、日本海を通じた太平洋への出口としてウラジオストクの港と町の建設を開始しました。文字通り「東方征服」の拠点として建設が始まったわけですが、1878 年に海軍基地が置かれてから都市全体を覆う「要塞都市」が約 40 年間にわたって築かれました。



金角湾に面したウラジオストクの町を中心にして、半島のアムール湾側とウスリー湾側、対岸のルースキー島、その先のポポフ島にも、分厚いコンクリートで塗り固められた夥しい数の砲台、堡塁、地下壕など要塞の遺構が残されています。その数 121 施設、避難所や通路、溝、庭など付属施設を含めると約 500 もの数にのぼります。

現在ウラジオストクでは、これら歴史的建造物である要塞群をユネスコの世界遺産に登録する準備が始まっています。2019 年の大統領令で『ウラジオストク要塞』という連邦博物館保護区が設営され、要塞遺構の保護とインフラ整備、歴史遺産としての広報活動が進められています。海外からの観光客を誘致する目的があるのはもちろんですが、すでに一部の要塞は以前から民間に公開されており、「要塞見学ツアー」や「アドベンチャーゲーム」、さらにイベント会場としても使われています。ルースキー島のポスペロポ要塞では「ランドアートフェスティバル」の音楽コンサートが行われています。

市内のアルセーニエフ博物館で昨年秋から「ウラジオストク　要塞の日々」という特別展が開催されており、オンライン懇談サロンでは、特別展の映像資料を鑑賞した後、田代さんの丁寧でわかりやすい解説が行われました。

特別展「要塞の日々」：https://youtu.be/2txcQp-5Z5g

ウラジオストク要塞専門サイト（ロシア語）： http://fortvl.ru/

ドキュメンタリー映画「海を越える愛」オンライン上映会

10 月 3 日、札幌国際短編映画祭と日本ウラジオストク協会の共催で、短編映画「海を越える愛」のオンライン上映会&トークショーが行われました。映画を鑑賞した後、意見交換をするオンライン日ロ交流イベントです。

映画を企画制作したのは、ウラジオストクで島根県からボタンの生花輸入販売を行っているアンドレエワ・エレーナさんが組織する「花道プロジェクト」。映画の舞台は、ウラジオストクと島根県の松江市、隠岐の島です。

アンドレエワ・エレーナさん

日露戦争（1904 - 05 年）の日本海海戦で破損・沈没したロシア艦船から流れ出たロシア水兵の遺体が島根県沿岸や隠岐の島に漂着し、住民が引き揚げて丁寧に埋葬した事実は日ロ関係者の間で知られています。そのロシア人墓地を守り世話する人の中に、第二次大戦後のシベリア抑留体験者とその遺族がいます。一方、ウラジオストク近郊には抑留者の捕虜収容所跡があり、抑留中に死没した日本人兵士の墓があります。エレーナさんの叔母は幼いころ重病になり、収容所にいた日本人医師に命を救われました。映画は、エレーナさんがインタビュアーとなり、3 人のロシア人と 6 人の島根県民から家族の戦争にまつわる思い出を聞き取り、それぞれ異国で亡くなった人たちの墓を守りつつ日ロ交流に取り組む思いを静かなトーンで描いています。

日露姉妹都市・地域交流年の始まった年に完成した本作品は、今年 15 周年を迎える札幌国際短編映画祭に出品されました。映画祭には世界 108 カ国から 3873 編の作品が集まりうち 102 作品がノミネートされました。「海を越える愛」は惜しくもノミネートされなかったものの、日ロ交流関係者に是非見てもらいたい作品だということで、今回のオンライン上映会となったものです。

映画「海を越える愛」（日本語字幕付き 28 分）は YouTube で無料上映中です。時間がある時、是非見てください。感動します。→ https://youtu.be/ePbn7Hvnlj8?t=1

なお、島根県は 1991 年にロシア沿海地方と「友好交流に関する覚書」を交わし、来年で姉妹交流 30 周年を迎えます。相互理解をより一層深めるために、島根県ではロシア民族アンサンブルのコンサートや子供の絵の交換、ウラジオストクでの島根の伝統工芸品展示会などの交流事業が活発に行われています。

アンドレエワ・エレーナさんの日本への思いを綴ったエッセイは、本誌第 202 号に掲載した『日ロ合同エッセイ集』の記事および本号 6 頁で紹介している日ロ共同出版『2 時間で逢える日本 - ウラジオストク』に収録されています。

シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い 8月23日国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で開催

第二次大戦後、旧ソ連・モンゴルで抑留中に犠牲となった遺骨 1 万 7 千余柱が納められている千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、今年も 8 月 23 日に追悼の集いが開催されました。当初は元抑留者らで組織する全国抑留者補償協議会が中心になって行われてきた追悼の集いですが、2011 年の同協議会解散後は「シベリア抑留者支援センター」が後を引き継ぎ、日本ロシア協会などの関係団体とともに開催しています。毎年 8 月 23 日に開催されるのは、この日が 1945 年にソ連のスターリンが日本軍将兵捕虜 50 万人の抑留・強制労働に関する秘密指令を「国家防衛委員会」名で発した日だからです。

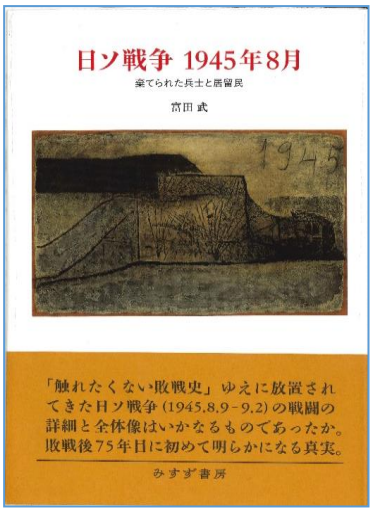
追悼の集いは、シベリア抑留者支援センター・有光健氏の司会で 13:00 から始まり、主催者あいさつの後、厚生労働大臣（代理）と各党国会議員（自民党、立憲民主党、国民民主党、公明党、共産党、日本維新の会、令和新撰組）の来賓あいさつ、遺族代表による追悼の言葉と続き、最後に全員で献花して終了しました。

旧満州（中国東北部）などにいた元日本兵など約 57 万 5 千人がシベリア・旧ソ連各地に抑留され、うち約 5 万 5 千人が死亡したとされるシベリア抑留の実態はまだ十分に解明されておらず、遺骨の収集は 2 万柱余りと半分も進んでいません。2010 年に議員立法で成立したシベリア抑留者特別措置法は、元抑留者に特別給付金を支給すること、国が遺骨収集に取り組み、全容解明を進めることなどを定めていますが、昨年、厚労省が持ち帰った遺骨に日本人以外のものが多数含ま

れていたという不祥事が発覚して大問題になりました。追悼の集いでは、支援センターや遺族の代表が、シベリア抑留の実態解明、遺骨収集、記録の保存など事業の抜本的な強化を訴えました。戦後 75 年が経過し、抑留体験者が年々減り、生存者の平均年齢は 100 歳近くになります。遺族も高齢化している中で、歴史の継承が課題となっています。(F)

本の紹介

「日ソ戦争 1945 年 8 月 ～棄てられた兵士と居留民」



富田　武　著
みすず書房
四六判 370 ページ
ハードカバー
定価：3800 円＋税

第二次大戦で日本がポツダム宣言を受け入れ無条件降伏したのは、アメリカの広島・長崎に対する原爆投下とソ連の対日参戦のどちらが『決定打』だったか？ 著者は、「単純に比較できないが、日ソ中立条約があり、終戦の仲介を頼ったソ連に見放されたという心理的打撃の方が大きかったのではないか」と見る。(8 月 12 日毎日新聞夕刊)

第二次大戦で日本はどこの国と戦って負けたか？ 多くの日本人は「日本はアメリカに負けた」と言うが、「日本は中国に負けた。ソ連に負けた」とは言わない。実際には、日本はアメリカ、イギリス、中国、ソ連をはじめ世界 50 カ国以上を敵に回して戦ったのであり、わずか 1 か月足らずとはいえソ連とも激しく戦火を交え敗北したのである。

シベリア抑留研究の第一人者である著者にとって、抑留の原因となった日ソ戦争を書くことは「長年の宿題」だった。しかし、旧ソ連の公文書が機密解除されず 1945 年 8 月の日ソ戦争の詳細を描くことは困難だった。戦後 70 年以上が経過して昨年 6 月にようやくロシア国防省の日ソ戦、独ソ戦関係の公文書が機密解除されたことで、チャンスが巡ってきた。

――「日ソ戦争」はソ連軍 170 万、日本軍 100 万が短期間であれ戦い、日本側の死者は将兵約 8 万、民間人約 25 万、捕虜約 60 万を数えた、明らかな戦争であった。

本書は、現在まで「触れたくない敗戦史」ゆえに放置されてきた日ソ戦争(1945. 8. 9 - 9. 2)の全体像を初めて描くものである。旧ソ連の公文書と日本側資料、日本人兵士の回想の三つの視点から戦闘現場の詳細を追った「第二部 日ソ八月戦争」を軸に、軍事的側面を中心に、これまで断片的にしかわかっていなかった戦争の真実を明らかにしていく。
（本書、裏カバーの解説より）

本書の構成は、軍事・歴史知識に乏しい読者のための「用語解説」と簡単な「兵器図解」を最初に置いたあと、
序論 本書の狙いと意義
第一章 戦争前史――ヤルタからポツダムまで
第二章 日ソ八月戦争
第三章 戦後への重い遺産
となっている。圧巻は第二章。ソ連軍は 8 月 9 日を期して、旧満州の東部（ロシア沿海地方、ハバロフスク地方）、北部（アムール州）、西部（モンゴル）から一斉に進攻してきたわけだが、それに対して日本軍（関東軍）がどう戦ったか、日本側とロシア側の公文書（作戦命令や戦闘記録）を突き合わせ、それに兵士の回想録を重ねて、各地での戦いを立体的に描き出している。また、ソ連軍の満州での蛮行や捕虜の留置・移送、関東軍の「棄民」策（軍関係者や軍人家族の避難を優先して開拓団員や居留民を見殺しにしたこと）などを具体的な史料にもとづいて詳述している。

本書は立ち遅れてきた日ソ戦の本格的な分析の第一歩をしるす記念碑的作品として、多くの人に読んでいただきたい作品である。(F)

「ロマノフ王朝時代の日露交流」

監修：東洋文庫
　　生田美智子
編：牧野 元紀
勉誠出版
四六判 520 ページ
ハードカバー
定価：3800 円＋税

江戸時代から明治時代、日露戦争を経てロシア革命前夜まで続いたロマノフ王朝時代のロシアと日本との交流の歴史を、アジア関連資料の宝庫と言われる『東洋文庫』所蔵の史料とともに、最新の研究成果に基づいて探った書物。漂流民を通

した日露交流から、幕末の日露交流、明治以降の学術交流や日露皇室外交など、内容は専門的な研究書だが、執筆陣による初心者にもわかりやすい平易な文章と豊富な図画・写真資料で、とても読みやすい本になっている。

「今年は戦後 75 周年という記念すべき年に当たる。ロマノフ王朝が滅んで以来、日本とソ連は、シベリア出兵、張鼓峰事件、ノモンハン事件、日ソ戦争と四回も戦火を交えた。そのこともあってか、現代の日本人のロシア観は、残念ながら芳しくない。

しかし、日露交流史を長いスパンでその源流から視野におさめると、江戸時代にはロシアは人気ナンバーワンであったことに気づく。1792 年、大黒屋光太夫が第 1 回遣日使節団に護送され帰還して以来、漂流民を護送してくれる親切な女帝としてエカテリーナ女帝の肖像画が出回り、ピョートル大帝も人気をえた。幕末には、ペリーの砲艦外交に比べてプチャーチンのロシア艦隊は紳士的態度であったので、地元でも幕府でも「穏やかなる国風」と人気を呼んだ。

明治政府になって日本が大陸に進出すると日露は戦争を起こすが、戦後は利害の一致をみいだし関係を修復し、日露戦争後約 10 年間はまれにみる日露「友好の時代」となった。」（「監修のことば」より）。

現代日本人の「好きな国、嫌いな国」の意識調査をすると、ロシアは相変わらず「嫌いな国」が多数を占めるが、日ロ関係の歴史をひもとくと、両国の関係が本当に険悪だったのは第一次大戦＝シベリア出兵から第二次大戦＝日ソ戦争、そして戦後の冷戦時代の近現代のことであることに気づく。

東洋文庫は、日本を代表する東洋学の研究機関で 100 万点を超えるアジア研究の貴重な図書を有している。それらの多くは中国を中心とする東アジア地域を対象とするものだが、ロシアに関係する史資料もかなり存在している。本書は、東洋文庫が 2017 年に開催した『ロマノフ王朝展～日本人の見たロシア、ロシア人の見た日本』、および 2012 年に開催した『もっと北の国から～北方アジア探検史展』の準備、実施過程で整理された史資料をベースに、15 名の執筆陣がロマノフ王朝 300 年にわたる日本との交流史を時代ごとに区分して解説したものである。掲載されている図版は 200 点以上に及ぶ。論文の間にはさまれた「歴史散歩」コラムを読むのも楽しい。

ロマノフ王朝時代の日露交流を視野におさめると新たな風景が見えてくるようである。膠着状態に陥った感のある日ロ平和条約交渉を前に進めるためにも、日露関係を長い歴史的スパンでとらえ直し、打開の糸口を探ってみる必要があるのではなかろうか。（F）

＊本誌第 202 号で樫本真奈美さんに紹介していただいた「日ロ合同エッセイ集」がついに出版されました。以下、出版にあたって日本側コーディネーターを担当された前川製作所の西川洋さんから、寄稿していただきました。（編集部）

本の紹介

「２時間で逢える日本－ウラジオストク」

西川　洋（前川製作所）

日ロ共同制作『２時間で逢える日本－ウラジオストク』（ロシア語版題名:Владивосток-Япония:два часа до встречи）がようやく完成しました。

約２年以上かかりました。極東連邦大学のオリガ・マリツェヴァさんが企画編集者として、監修は同大学のゾーヤ・モルグン先生が行い、私は日本側のコーディネーターとして発行までを担当しました。翻訳は樫本真奈美さんにお願いしましたが、彼女の全面的な協力がなければこの文化本の発行は実現出来ませんでした。改めて彼女に感謝します。

第１章「大仏にかかる虹」ではウラジオストクに仏像を寄贈した松永忠君氏の文化社会活動を中心に鳥取県シベリア抑留者犠牲者の墓参活動をロシア人の視点から紹介、第２章「対岸をつないで」では、様々な分野で活躍されている日ロ関係者から 63 名のエッセイを集めました。約 400 ページの日本語版とロシア語版をそれぞれの国で印刷しました。

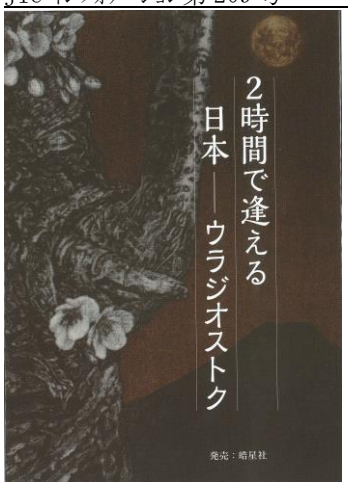
この本がきっかけとなり、加藤登紀子様、すしざんまいの木村社長、弊社前川製作所の創立者の長男前川昭一や在日ロシア人等、両国の著者同士の交流が始まったことも嬉しい限りです。

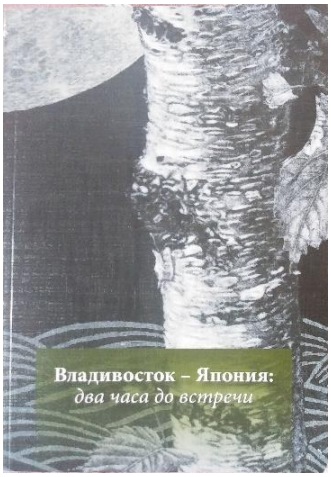
本エッセイ集制作について

ロシアと日本の考え方やモノづくりに対する理解の違いは、本書ロシア語版と日本語版の違いを見るだけで一目瞭然です。読者の皆様！この両国の文化本を実際に手に取ってその大きな違いを実感してください。この本をひとつとっても、日本品質を理解することができるでしょう。

現在、極東ロシアと日本において、様々なプロジェクトが各省庁の肝いりで進められています。民間企業が主体となり各案件が出ています。ウラジオストクの東方経済フォーラム等の場で契約や覚書締結を行ってきましたが、国からはその成果についてたびたび聞かれます。

実際、政府間のレベルでは実務は進みません。ロシアの現地、現場、現物を知らない、そして感じ取ることができない者が進めようとしても進展はなく、最終的には我々のような両国民の気持ちや言葉を含む各専門分野のノウハウを持つ日本人がいなければプロジェクトを具体化させることは難しいように思います。委託事業として、結果報告書の提出のみで終了というケースが多いように見受けられますが、これこそ、





日ロ両国の共同プロジェクトの名目で両国の税金を無駄遣いしている面も多いのではないでしょうか。

今回の日本語版制作にあたり、最初から最後まで試行錯誤しながらロシア側との考え方の違いを主張し、妥協をせずに資金を準備し高品質の本を完成させた活動こそ、我々民間外交の具体的な成果のひとつではないかと思います。

ロシア人との出会い

私は 45 年もロシア人と付き合ってきましたが、その発端を少しご紹介します。

私は和歌山市に生まれ、関西大学法学部に入学し第 2 外国語でロシア語を選択したのが最初のきっかけでした。ロシア語の小泉教授の授業が気に入り、2 年間の一般教養課程では物足りなくなり、週末の個人授業と、週に 2 度の日ソ学院における夜間のコースでロシア語を学びました。その大きなきっかけとなったのは、大学 2 年生の時にロシア語通訳としてモスクワの中央人形劇の日本公演でアルバイトをした事です。アルバイト仲間であった他の外国語専門のロシア語学生に比べて何も話せず、悔しい思いをしたことでした。大学 4 年生の時、劇団員が横浜港からバイカル号で帰国する際、埠頭で色とりどりの紙テープを投げ合い、別れを惜しんでいました。ドラムの音が鳴り響き、いよいよお別れとなった瞬間に、何とも言えない悲しみがあふれ、涙が止まらなくなりました。その時、自分はロシア人と一生付き合おうと決めました。その気持ちは今も全く変わりません。

日本のデルス・ウザーラを自任する西川さん(左)

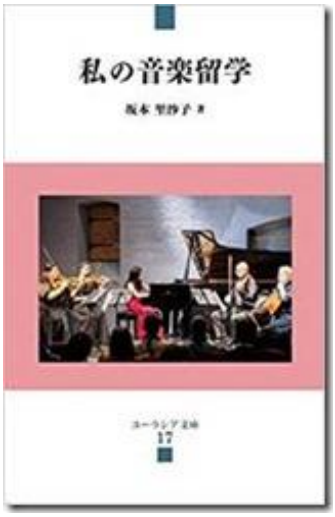
極東ウラジオストク

ウラジオストクには、知り合って 15 年以上の親友がいます。彼らと仕事のあとは、親しい仲間にてヨットや彼の友人の狩人とキジ、シカ、イノシシ狩り等を楽しんでいます。狩りの後、その夜はその肉をスープ(シュルパ)にして楽しみます。また、ウオッカの量が進みます。彼らは趣味で自分達のヨットを所有して週末はクルージングや釣りを満喫しています。陸上の車はほとんど日本の中古車が多いですが、海上のヨットもヤマハ等の中古製が多いのには驚かされました。秋のキジ狩りのあとはウラジオ港から日本の福岡港まで約 4 日間かけてヨットの旅を楽しんだこともあります。

極東ロシアの人々は、常に日本に関心を持ち、日本を向いています。もっともっと親しくなれる可能性があるのです。お互いの国民同士は、これからもっと仲良くなることが出来ますし、このような文化本の共同制作やその直接の議論の過程にお互いの絆が生まれ、民間レベルで真の良い成果を実現させることが出来ると信じています。

皆様ぜひ、各人のときめき、友情、文化活動、ビジネス、趣味が盛り込まれたエッセイを手に取ってお読みください！

「2 時間で逢える日本 - ウラジオストク」／皓星社
Ａ５版 400 頁 ソフトカバー／1000 円（送料別）
●本書専用ウエブサイト
https://japanvladivostok2020.wixsite.com/mysite



「私の音楽留学」

坂本 里沙子著
群像社
(ユーラシア文庫)
新書版
定価：990 円＋税

高校を卒業して間もなく、世界 3 大音楽院のひとつチャイコフスキー記念モスクワ音楽院に単身入学を決意した若者。はじめてのロシアでロシア語もよく分からないままはじまった 6 年間の留学生活には日々の苦労や発見があふれている。国際色豊かな学生たち、ロシアの心を伝える音楽や風景、留学生活のなかで肌で感じた印象を書き留めた卒業までの日々の記録。

【著者：坂本里沙子プロフィール】
桐朋女子高校音楽科卒業後、ロシア国立モスクワ音楽院入学。2014 年スクリャービン国際コンクール第 2 位、若いピアニストのためのリガ国際コンクール第 1 位。2019 年ロシア国立モスクワ音楽院卒業、ロシア国家演奏家資格を取得し帰国。国内外の多数のコンサートに出演している。

ロシア映画情報

セルゲイ・ロズニッツア監督「群衆」ドキュメンタリー3 選

11 月 14 日～12 月 11 日、渋谷シアター・イメージフォーラムにて一挙公開！ 全国ロードショーを順次開催！

カンヌ国際映画祭で二冠、近作 10 作品すべてが世界三大映画祭に出品されているセルゲイ・ロズニッツア監督のドキュメンタリー映画 3 作品が 11 月から日本で初公開されます。

独裁者スターリンの国葬を記録したアーカイブ映画『国葬』と、スターリンによって行われた 90 年前の裁判を記録した『粛清裁判』は、ソ連・ロシアに現存する膨大な記録映像を見事につなぎ合わせて歴史の真実を浮き彫りにしています。ホロコースト（大量虐殺）の現場となった元強制収容所を観光するダークツーリズムのドキュメンタリー『アウステルリッツ』も含めて、ロシア史・現代史に関心ある方は必見です。

セルゲイ・ロズニッツア

1964 年生まれ、ウクライナ出身。現在ベルリン在住。1991 年モスクワ全ロシア映画大学に入学、1996 年からサンクトペテルブルグ・ドキュメンタリー映画スタジオで映画監督キャリアをスタートさせる。これまでに 21 作のドキュメンタリーと 4 作の長編映画を発表している。

『国葬』（2019／カラー、モノクロ／ロシア語／135 分）
第 76 回ベネチア国際映画祭　正式出品

1953 年 3 月 5 日、スターリンの死がソビエト全土に報じられた。発見されたフィルムにはソ連全土で行われたスターリンの国葬が記録されていた。67 年の時を経て甦る人類史上最大級の国葬の記録は、独裁者スターリンが生涯をかけて実現した社会主義国家の真の姿を明らかにする。

『粛清裁判』（2018／モノクロ／ロシア語／123 分）
第 75 回ベネチア国際映画祭　正式出品

1930 年モスクワ。8 名の党活動家が西側諸国と結託しクーデターを企てた疑いで裁判にかけられる。発掘された 90 年前のフィルムは無実の罪を着せられた被告人たちと、それを裁く権力側を記録していた。捏造された罪と真実の罰。スターリンによる大粛清の始まり。

『アウステルリッツ』（2016／モノクロ／ドイツ語他／94 分）　第 73 回ベネチア国際映画祭　正式出品

ある夏のベルリン郊外。群衆が門に吸い寄せられていく。辺り構わずスマートフォンで記念撮影する人々。ここは第二次世界大戦中にホロコーストで多くのユダヤ人が虐殺された元強制収容所だ――ドイツ人小説家W・G・ゼーバルトの著書と同じ名を冠する、ダーク・ツーリズムのオブザベーショナル映画。**公式ホームページ** ↓

https://www.sunny-film.com/sergeiloznitsa

ソビエト時代のタルコフスキー

「僕の村は戦場だった」「惑星ソラリス」「ストーカー」など 6 作品上映！

ソ連映画の巨匠アンドレイ・タルコフスキーの長編 6 作品が 11 月に東京と京都で上映されます。

アンドレイ・タルコフスキー

1934 年～1986 年。長編監督作は 7 本と寡作だが、水、雨、光など自然を駆使した抒情的な作風により「映像の詩人」と呼ばれ、世界中にファンを獲得した。ソ連からフランスに亡命して 2 年後の 1986 年、肺がんにより 54 歳でパリで客死。

上映作品；「ローラとバイオリン」「僕の村は戦場だった」「アンドレイ・ルブリョフ」「惑星ソラリス」「鏡」「ストーカー」
上映予定：
アップリンク渋谷 11 月 6 日～11 月 26 日
アップリンク京都 11 月 20 日～12 月 10 日
アップリンク吉祥寺　近日発表
配給：**パンドラ** → http://www.pan-dora.co.jp/?cat=114

セルゲイ・ボンダルチュク生誕 100 周年記念特集

戦争と平和（4 部作）など 8 作品上映！

アカデミー賞受賞作「戦争と平和」（原作:レフ・トルストイ）で知られるソ連映画監督セルゲイ・ボンダルチュクの生誕 100 周年を記念して、8 作品が公開されます。

セルゲイ・ボンダルチュク

1920 年～94 年。第二次大戦後の 1948 年全ソ国立映画大学を卒業、俳優としてキャリアをスタート。初監督作品「人間の運命」（1959 年）でレーニン賞受賞。「戦争と平和」でアカデミー賞最優秀外国語映画賞を受賞。

上映作品：「戦争と平和」第一部 アンドレイ、第二部 ナターシャ、第三部 1812年、第四部 ピエール、「セルゴー神父」「祖国のために」「人間の運命」「ワーテルロー」
上映予定：
アップリンク京都　10 月 30 日～11 月 19 日
広島・映像文化ライブラリー 11 月 1 日～13 日
沖縄・桜坂劇場　12 月 12 日～18 日　など。
配給：**パンドラ** → http://www.pan-dora.co.jp/bondarchuk/

9月26日大阪でロシア・フェスティバル

延べ参加者600名の大盛況

小原　浩子（JIC 大阪）

9 月 26 日(土)、涼しくなってきた大阪で、Russian Culture Festival というイベントが行われました（主催：ロシアカルチャーセンター京都）。当初 3 月に実施予定だったこのフェスティバルですが、新型コロナの感染拡大で延期を余儀なくされ、感染が収まってきたこの時期に開催となったものです。

主催のロシアカルチャーセンター京都は、京都在住でロシア民族舞踊チーム「カチューシャ」を主宰するヴィクトリア・トルストヴァさんが、日本人にもっとロシアを知ってもらいたい、ロシア人にもっと日本を知ってもらいたいという思いから仲間と立ち上げた団体で、このようなフェスティバルはすでに京都で何度か開催されていますが、大阪では初めての試みです。会場は新今宮にオープンした YOLO BASE。在日外国人の就労支援や住宅斡旋を行う YOLO JAPAN という企業が運営するホテル兼イベントスペースで、現代アート作家がデザインを手がけたというおしゃれな空間でした。

当日は 11 時から入場開始。コロナ下のイベントとあって入場時にはマスク着用、体温測定と手指消毒がしっかり行われました。受付名簿には名前と電話番号の記入が義務付けられ、あわせて「大阪コロナ追跡システム」の登録も推奨されました。1 ドリンク付 1,000 円の入場料を支払い会場に入ると、イベントスペースの奥半分に舞台と観客席、その手前中央に四角く区切られたスタンディングバー・カウンターがあり、その周りに関西のロシア料理店やカフェ、雑貨店の屋台が出店して、ロシア風水餃子（ペリメニ）やピロシキ、ビーフストロガノフやボルシチなどのロシア料理、またマトリョーシカやプラトークなどのロシア雑貨、チョコレート、紅茶などを販売していました。マトリョーシカの絵付け体験コーナーやネイルアートのワークショップも開催され、子供たちが熱心に制作している姿が見られました。

11:30 をすこし回った頃に、きれいな日本語を話すロシア人女性司会者により開会が宣言されました。開会挨拶はヴィクトリア・トルストヴァさん。その後、在大阪ロシア総領事館のシュベツォヴァ副領事、YOLO BASE の加地代表、大阪市経済戦略局の鳥山部長と挨拶が続きました。

いよいよショーの始まりです。ヴィクトリアさんをはじめとするロシア民族舞踊チーム「カチューシャ」のメンバーが華やかなロシア民族衣装を着て、ロシア人歌手の歌うロシア民謡に合わせてダンスを披露しました。加藤登紀子さんが歌ってヒットした「百万本のバラ」はソ連時代のロシア歌謡曲

ですが、その原曲がロシア語で歌われました。歌手の周りでは、バラの花を持った美しいダンサーたちが優雅に舞い踊り、場を盛り上げました。

昼過ぎからも来場者は途切れることなく、13:00 からのファッションショーは椅子席の後方に立ち見がずらりと並ぶ盛況でした。ロシアの伝統的な柄をプリントしたショール（プラトーク）で作られた衣装を着たロシア人のキッズモデルがランウェイを堂々と歩き、ポーズをとっていました。

フェスティバルは 11:00 開場で、ロシア民族舞踊や歌、ファッションショー、DJ パフォーマンスなどをはさみながら夜 21:00 まで行われましたが、常時 100 名から 200 名の日本人とロシア人が会場を埋めていました。屋台の周りでは日本語とロシア語が飛び交い、まったく大阪にこんなにたくさんのロシア人がいたのかと思う景観でした。

主催者によればこの日の参加者数は 470 名、フリーで入場した子供たちや会場運営に当たったスタッフを含めると総数 600 名近い人で賑わったことになります。

今回の成功を踏まえて、ヴィクトリアさんは来年 3 月にも大阪で第 2 回目のフェスティバルを開催する予定です。また、京都府舞鶴市などロシアと交流している自治体からもイベントを一緒に開催したいという提案が来ているとのこと。ロシアカルチャーセンターの活動は益々広がりそうです。

新型コロナだけでなく、在日外国人としての様々な制約や困難がある中でもこのような大規模なイベントを開催し成功させたヴィクトリアさんはじめ関係者の方々の努力と実行力に敬意を表しつつ、大阪・関西でロシア人と日本人との身近な交流がさらに広がることを期待します。

前回に引き続き、倉谷恵子さんのキルギス・レポートをお届けします。今年９月から第４期目の日本語教師ボランティアが倉谷さんを含めて４名、ビシュケクに出発する予定だったのですが、新型コロナの影響で渡航が遅れています。９月から始まる新学期をとばして来年１月の２学期から現地に赴任する予定ですが、新型コロナの感染状況によっては再度変更があるかもしれないのが悩ましいところです。

ともあれ、倉谷さんのレポートをお楽しみください。(編集部)

キルギスで日本語を教える(2)

日本人として伝えたいこと

倉谷　恵子(キルギス日本語教師ボランティア)

キルギスで日本人が小学生に日本語を教える意味は何なのか。母国語の筆記もおぼつかない小学１年生を前に自問自答していた。

文法や会話だけを教えるなら現地のキルギス人教師で十分だし、ステレオタイプの日本文化の紹介であれば通りすがりの日本人旅行者でもいい。キルギス人の生活や考え方を理解しながら、現地で暮らしている私たちだからこそできる授業をしたい。

私は野球投手を思い描いていた。軸足をしっかり定めつつ、児童に向かって球を柔軟に変化させながら投げるためだ。自分の立ち位置を認識して軸さえぶれなければ、多少授業がわき道にそれたり、予定通りに進行しなくてもご愛敬だろう。

では軸足はどこにあるか。私は次の２点を意識した。

１点目は教える対象が小中学生であること。病院の診療科には小児科があり、内科では子どもの心身の不調に十分に対処できないのと同様、日本語教育においても大人と同じような文法指導と芸術文化の紹介を子どもにしても効果はない。言葉の吸収の仕方は大人と明らかに異なり、理屈で教えるよりも感性を尊重する方が能力は伸びるし、人生の基礎となる期間にこそ言葉を通して身に付けるべきことがある。

２点目は自分が日本人であること。日本が世界の他の国々とどう違うのか、日本の特異性を認識し、米国でも中国でもロシアでもない、日本という国で生まれ育った人間として身に付けたことを伝えるのが使命だ。

この軸足を基本にどう球を投げるか。プロ野球の試合ではないから、高難度の剛速球を投げる訳にはいかない。変化をつけながらも子どもたちがある程度打ち返せる球を与える必要がある。授業ごとのすべての球は紹介できないが、今回は特に記憶に残っている２つの授業を記したい。

子どもは大人を見て育つ

ひとつ目はキルギスにおけるゴミの問題を取り上げた授業だ。

首都ビシュケク近郊は車の排気ガスや石炭の煙で大気が汚れていることは前回書いたが、自然豊かな国のイメージをさらに台無しにしているのが、公園の隅や空き地、小川の土手などあらゆる場所に散乱するゴミである。空き瓶を詰めた袋を草むらに置き去りにしていく老婦人、目の前にゴミ箱があるにも関わらずたばこの吸い殻を道の反対側に放る中年男性、運転中の車の窓からペットボトルを投げる運転手等々、大人が平然とゴミを外に捨てる。

道端に散乱するゴミの山

キルギスではゴミ収集時に分別はせず、ゴミ削減の意識も希薄だ。バザールで買い物をするとわずかな量でも必ずレジ袋に入れられる。最近はマイバッグ持参を呼びかける人々も出てきたがまだごく少数で、私がレジ袋を断って自分の買い物袋を差し出すと多くの店員はおどろく。ゴミの行き着く先に関心を持つ人は少なく、放棄されたゴミから出る有害な物質が環境を汚染し、ゆくゆくは自らの生活にも影響を及ぼすという認識を共有することは難しい。

残念ながら私が勤める学校の子どもたちが道にゴミを投げ捨てる姿も何度か目撃した。下校のスクールバスのなかのことだ。最前席に座っていた高学年の子どもが走行中のバスの

窓から飴の包み紙を投げた。普段は下級生の面倒をよく見る世話好きの子どもである。私は即座に注意した。彼女は少し気まずい顔をした。その約１カ月後。前回注意をした彼女が、今度は停車時に他の子どもがバスから降りる瞬間を見計らって、ドアの下からアンダースローでチョコレートの包み紙を放った。人に見えなければいいと思ったのか。懲りていなかったのだ。

学年で 1、2 を争う優秀な子どもが自宅前の街路樹の下で飴の包み紙を捨てる場面にも出くわした。私はすぐに包み紙を拾い、手に握らせて家へ持ち帰るように言った。彼女はその時、私と視線を合わせなかった。彼女の妹がそばで何も言わずじっと成り行きを見ていた。

ゴミを放る子どもを責めることはできない。大人の姿を見て育っているのだから。日本のようにゴミのリサイクルや分別収集を議論する以前に、「ゴミはゴミ箱に捨てる」、「ゴミを外に捨ててはいけない」といった当然のことすら、あえて口にしなければならない現実がキルギスにはある。

ゴミの処分は今や地球規模の問題だ。近い将来、キルギスの人々もゴミの問題に向き合わなければいけなくなる。事態が深刻になる前に、自らが出したゴミに責任を持つ習慣を身に付けてほしい。

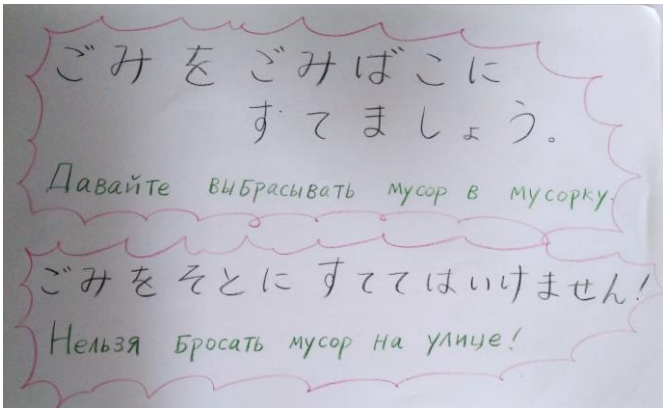
柔軟な脳を持つ幼少期こそ新しい習慣を作るチャンスである。児童たちに私の率直な思いを伝えることにした。

お絵描きで楽しみながらゴミ問題に向き合う

「キルギスへ初めて来た時、私はとてもおどろきました。道にたくさんのゴミがあったからです。日本では道にゴミを捨てません。街の中はいつもきれいです。私はキルギスの街が美しくなることを願っています。キルギスの人にはゴミを道に捨ててほしくありません。ゴミを外に捨ててはいけません。ゴミはゴミ箱に捨てましょう」

小学２年生の授業の冒頭、私はこの簡単な文章を日本語で何度か繰り返した後、ロシア語訳を読み上げた。日本語で話している時は意味が分からずにぽかんとしていた子どもたちが、ロシア語を読み終えた後、少しだけ神妙な表情になった。「分かりましたか？」と問うと大部分の子どもが「はい」と大きく首を縦に振った。おしゃべりに興じる生徒は相変わらずいたものの、予想以上に前向きな反応が多かった。７、８歳の子どもたちは感情の赴くままはしゃぎ回って手に負えない反面、まだ素直な心を備えている。捨ててはいけない理由やリサイクルの必要性を長々と説くよりも、目に見える光景の美醜を端的に伝える方が理解しやすい。

「～ましょう」や「いけません」の練習を兼ねて、「ごみをごみばこにすてましょう」、「ごみをそとにすててはいけません」の２つの文章を何度も復唱し、１枚の紙に日本語をひらがなで、訳をロシア語で書かせ、余白に自由に絵を描かせた。「何を描けばいいの」と尋ねてくる子どもたちに「考えてごらん。ゴミを捨てる男の子、女の子、ゴミ箱、ゴミの山、何でも好きなものを描こう」と答えながら、私も下手な絵を黒板に描く。手はチョークを動かし、口では何度も「ゴミをゴミ箱に捨てましょう」とつぶやく。子どもたちは皆、絵を描くことが好きだ。ゴミを投げる人の姿を描いて×印をつけ、ゴミ箱に捨てる姿に〇印をつけるなど様々な工夫をして色鉛筆やマジックで色とりどりに文字と絵を仕上げていく。



授業の終わりに「この紙を家の壁に貼って、２つの文章を覚えてきてください」と宿題を出した。普段の授業態度から考えて、紙を家に持って帰るかさえあやしいのだから、覚えてくるとは期待していなかった。

翌週、「覚えてきましたか？」と尋ねると、一握りの真面目な子どもが手を挙げて 2 つの文章をゆっくりと口にした。自宅前でゴミを捨てた中学年の子どもの妹もそのうちの１人で、彼女は率先して２つの文章を暗記していた。予想通り残りの子どもは宿題の存在すら忘れた顔をしていたが、ゴミやゴミ箱という単語レベルでは多くの子どもが記憶していた。

２年生は全クラスである程度の手ごたえを得られたが１年生はどうだろうか。授業中も走りまわって収拾がつかない彼らに、ゴミの問題をちゃんと伝えられるか不安だった。だから紙に書くことはせず、私が日本語とロシア語の文章を言って聞かせるだけにしようと決めて授業にのぞんだ。

ところがふたを開けてみると反応は良好で、私がタバコのポイ捨てをジェスチャーで指摘すると、「タバコは体に良くないよ」と健康問題まで持ち出す子どももいた。さらに驚いたことに「２年生の友だちが絵を描いた紙を見せてくれた。僕も書きたい」と言い出す子どもが現れた。教室外で子ども同士がつながり、授業の話題が伝わっていたのだ。これはありがたかった。急きょ予定を変更して１年生にも「ごみをごみばこにすてましょう」の文章と絵を描かせることにした。

幼い彼らがゴミを確実にゴミ箱に捨てるようになったかは分からない。それでも外国人が自分たちの国の風景を見て残念に感じている事実を知り、街を美しくすることに一時的にでも思いを致してくれたなら一歩前進だと思う。

折り紙から学ぶこと

もうひとつのテーマは「折り紙」だ。定番の日本文化の紹

介である。だが私が伝えたかったのは繊細な技や作品の美しさではなく、折り紙を通した学びの意味だった。

子どもたちは折り紙が大好きである。授業の最初に「今日は折り紙をします」と伝えると、「アリガーミ、アリガーミ！」ともろ手を挙げて喜ぶ。ロシア語のようにアクセントをつけて叫ぶので「アリガーミではありません。オリガミです」と毎回発音を直す。折り紙用の紙が豊富にある訳ではないので、白い A4 のコピー用紙を正方形に切って使うことが多く、作り終えたら色鉛筆で色塗りをし、マジックやペンで模様を描く。色塗りの楽しさが味わえるので、白い紙もかえって面白い。コピー用紙の切り取った部分は後日、小テストの紙として活用する。

普段の授業では適時ロシア語で意味を説明して進めるが、折り紙の授業では、日本語だけを口にしながら手本を示して折り進める。言葉の意味は分からなくても、生きた日本語に触れてもらうためだ。私はロシア語を使わず、子どもたちは読み書きをしないから双方ともに楽しいはずだが、決して気楽な授業ではない。

手本の折り方を手元で再現するには、図形の左右、斜め、前後を立体的に認識する能力が必要だ。正方形の紙を三角形にするには対角線を１度折るだけだが、慣れないうちはこの単純な折り方もすぐにはできない子どもがたくさんいる。折り方が分からないと即座に「先生、分からない！手伝って」と言いながら走り寄って来て教室の前に群がり、分かった場合は「先生、これで正しい？」と聞きながら我先に自分の折り紙を私の目の前に差し出してくる。「席に着いたまま静かに折りましょう」と言い聞かせても子どもたちの耳には届かない。

20 人以上の子どもに対して教えるのは自分１人だから、体がいくつあっても足りず、各自に目配りをしていると、通常の授業の倍以上のエネルギーを使うことになる。そして何とか折り終えても、角を丁寧に折らないので見本とかけ離れた形に仕上がってしまう子も大勢いる。

こんな授業を何度か繰り返すうちに「これでは折り紙は子どもにとって単なる遊び、私にとっては体力の消耗でしかない」と思うようになった。騒がしくても、きれいに仕上がらなくても、折ること自体に意義があると言えばその通りだが、それならば休み時間や放課後のお楽しみにすればいい。授業時間に折り紙を取り入れる意義は何なのか。

多彩な紙を使った芸術作品としての折り紙であれば、インターネットでいくらでも知識を得られる。日本人が直接海外の子どもに折り紙を教えるのならば、伝えるべきことは他にもあるはず。自分なりに考えてみた。

小さな作業に丁寧に取り組む

「皆さん、折り紙は好きですか。折り紙は日本の文化です。何のために授業で折り紙をするのでしょう。単なる遊びですか。いいえ、これは勉強です。十分に考えること、手本を注意深く見ること、きれいに正確に作ること、お互いに助け合うことを学びます。先生の手本をよく見てよく考えましょう。あきらめてはいけません。角をきれいに折りましょう。できない友達を手伝いましょう」。

伝えたい内容を単純化したのがこの文章だ。

折り紙はすべての工程で丁寧に角を折れば美しく仕上がる。逆に一度でもどこかで手を抜いて雑な折り方をすれば、それ以後の手順に影響が出て今一つの出来になる。全工程に丁寧に取り組むことで満足いく仕上がりを目指すというのは、日本人が仕事をする時の姿勢そのものだ。

日本語を学んだキルギスの子どもたちが将来、日本で働く機会を得たならば、彼らには単なる労働力として終わってほしくない。信頼される人材として活躍してほしい。そのためには日本人の感性を理解する必要がある。折り紙を通して、小さな作業をなおざりにせず丁寧に向き合う日本人の意識を伝えたい。その思いを先の短い文章に込めた。

ゴミ問題の時と同様、日本語を読んだ後ロシア語で訳すと子どもたちは一瞬、黙り込んだ。自らが折り紙をしているときの姿と照らし合わせて、何か思うことがあったのだろうか。「よく見てよく考えましょう。角をきれいに折りましょう。友達を手伝いましょう」の部分は「～ましょう」の練習を兼ねて、ひらがなとロシア語でノートに書き取り、復唱させた。

翌週の授業で早速折り紙をした。期待通りに事は運ばないもので、相変わらず「分からな～い」と駆け寄ってくる子どもは多く、あきらめそうな子もいた。一方で、できない友達を手伝う姿は増えたし、私が「角は鋭く折ろう。鋭く、鋭く！」と言ったら、面白がって「鋭く、鋭く！先生、鋭くできたよ！」と言いながら丁寧に折って見せてくるようにもなった。わずかでも折り紙をする姿勢に変化は見られたから、思いを言葉にすることには多少なりとも効果があったのだろう。

日本文化の本質は日常に宿る

日本文化の紹介というと、芸術や芸能、そして柔道、茶道などの「～道」に代表される伝統的な美や精神性、あるいはアニメーションを思い浮かべる。確かにそれらは分かりやすい日本像だが、大人になってからでも十分に触れる機会はある。私はむしろ言葉にする必要もないような日本人には当たり前の姿勢こそ、海外の子どもたちに知ってほしい。自分の出したゴミは自分で始末する、小さな作業に丁寧に取り組むといった私たちの日常的な行動にこそ日本文化の本質が宿っていると思うからだ。

今回は私の投げた球を紹介したが、子どもたちはどのように球を打ち返していたのか。

次回は子どもたちが授業で見せる反応や成長を紹介したい。

（つづく）

シベリアの愛♥ （最終回）

初めてのロシア滞在

稲塚　俊介（JIC 東京）

前回は、トラブル続きだった出発準備を終え、ついにノボシビルスクまでたどり着きました。

ノボシビルスクからトムスクまでの道のり

本来の目的地はトムスクですがフライトの都合上ノボシビルスクで飛行機を降り、そこから陸路トムスクを目指すことになりました。この時カーチャはお父さんの車で一緒に来てくれましたが 2 都市はどれくらい離れていると思いますか？Google Map によるとなんと約280km！日本で例えると新宿から福島市までの距離がまさに同じでした。運転が好きな人からすれば普通かもしれませんが、異国から来て会ったこともない人の為にここまでできるかと聞かれたら簡単ではないでしょう。ましてやその日のうちに往復し帰りは真夜中です。ロシア人の行動力と寛大さに感動してしまいます。ロシアは国土も広ければ心も広いですね。

空港を離れるとそこには街灯もほとんどなく、ひたすら長い道が続いていました。最初はとくに問題ありませんでしたが、途中から悪路が始まり大きな揺れが続きました。さながらジェットコースターに乗っているような錯覚さえ感じました。また、休憩のため途中停車して外を見渡しても先が見えないくらいシベリアの地は広大でした。

ロシアの空気の冷たさや土地の広大さに圧倒されながら目的地に向かっていると、さらなるインパクトが私を襲いました。車内で流れていたラジオを聴いてお父さんが笑っていたのでカーチャに訳してもらうと、「昨日、市内で男性二人が雪の上で凍死した」という内容でした。どうやら酔っぱらって路上で寝てそのまま凍死したらしいのです。まさにこれこそ「おそロシア」と言わんばかりのニュースで、それまであまりロシアについて知らなかった当時の私にはパンチが強すぎました…(笑)

最初の本場料理はやっぱりボルシチ！

そんなこんなで出発から 4 時間が経過し、トムスクに着いたのは午前 2 時頃でした。トムスクと日本の時差は－2 時間なのでそれほど時差ボケはなく、初のロシアに興奮して眠気は感じませんでした。それでもやはりお腹は空くであろうと見越して、お母さんがボルシチを作って待っていてくれました。優しさに感動して泣いてしまいそうです。なんせお母さんは次の日仕事なのに起きて温かいボルシチと一緒に迎えてくれました。

ボルシチはロシア料理定番のスープです。日本で言えば味噌汁的なポジションになるかと思いますが、赤い見た目のインパクトがあります。それまでボルシチを味わったことがなく初めてでしたが、スープを口にした瞬間体に沁みわたっていくのを感じました。まるで久しぶりに味噌汁を味わうような感覚になったことに驚きました。私の体にはロシアの血が流れているのでしょうか(笑)

写真はその時のボルシチ。上にのっている白いのはスメタナと呼ばれるサワークリーム。ビーツがあれば日本でも簡単に作れるのでレシピ検索して是非作ってみてください！具材はそれぞれの家庭でも異なるのでお好みで OK です。

いざトムスクの町へ繰り出そう！

ここでお世話になった家族について紹介します。当時、カーチャは同い年の 20 歳で大学生。ご両親は 37 歳でお父さんはパソコン関連の技術者、お母さんは看護師の 3 人家族＋猫 1 匹という構成。とても明るく優しい家族です。

まずは自宅周辺を調査するために出かけようとしますが、その前に服装チェック。まるで校則のような響きですが、ロシアの寒さを知らない私のためにレクチャーしてくれました。肌の露出をなくすことは当たり前ですが帽子を持っていなかった私は「正気か？」みたいなことを言われました(笑)。とりあえず着込んでいればいいと思っていたのですがそれでは甘かったようでした。そこでお父さんの帽子を貸してもらい外に出ました。

見事に外は一面銀世界。公園の遊具などは雪に埋もれて最初は公園だと気が付きませんでした。この時の気温はマイナス 15 度位でしたが意外と普通に過ごせることにビックリしました。しかし、風が吹きつけた時には顔が冷たいというよ

りむしろ“痛い”といった感じでした。それでもロシアの新鮮さが寒さに勝っていたのでそこまで気になりません。

街の見どころはいくつかあるのですが、トムスク国立大学がとても綺麗です。1888 年に設立されたシベリア最古の大学で外観からして歴史的建造物です。残念ながら写真はないのですが、ポストカードはいまでも大切に持っています。

家での過ごし方

最初に驚いたことは家の中がとても暖かいことでした。日本にいるときは暖房をつけていても長袖長ズボンとそれなりに防寒しますが、ロシアの家では半袖で十分です。アタプレーニエ（セントラルヒーティング）という暖房システムのおかげなのですが、まさか冬のロシアで T シャツの出番がくるとは想像もしていませんでした。

食事はお母さんがいつも美味しい手料理をふるまってくれました。ペリメニと呼ばれるロシア風水餃子や黒パンなどすべて初体験でしたがとても美味しかったです。日本においてロシア料理はイタリアンやフレンチと比較するとマイナーですが、日本人の舌に合うと思います。

また、ロシア料理に欠かせないのはウォッカでしょう。食事の時にお父さんは必ずウォッカを飲んでいたのでイメージ通りのロシア人の姿が目の前で見られて幸せでした。それでもウォッカを飲みすぎて路上で凍死する人もいるなど、ロシア人とウォッカの関係はとても興味深いものがあります。

日中は市内散策をし、夜はたくさん食べて飲んでという生活をしていると、あっという間に時が過ぎていきます。5 泊のホームステイも終盤に迫ったある夜のこと、ふと目が覚めてトイレに行こうとするとリビングから何やら“カチカチ”“はっはっはっー”と聞こえてきました。寝室からトイレまではリビングを通らないといけないので進んでいくと、そこには暗闇の中、上半身裸でヘッドホンをしながらパソコンゲームをしているお父さんがいました(笑)。どうやら友達とオンライン戦車ゲーム“World of Tanks”を楽しんでいたようです。ちなみにこのゲームは世界的に人気があるらしく、ベラルーシの会社が制作したようです。画面を指さして説明されてもロシア語はさっぱり分からないので“ブーン！ボーン！”の破壊音だけでやりとりをしました。

さらばトムスク！

初めてのロシアはすべてが面白く毎日が新たな発見で溢れていました。みんなでボードゲームをしたり、テレビでサッカーを観て盛り上がったり、などなど。それでも日本に戻らないといけないので、最後の夜はお世話になったご両親に手紙を書いて読みました。英語で書いてカーチャにロシア語に翻訳してもらいました。つたないロシア語で読みましたがとても喜んでくれました。最終日には空港で食べられるようにとお母さんがお弁当まで作ってくれました。改めてロシア人の温かさを肌で感じ、必ずまたここに来ようと思いました。残念ながら帰国する日は平日だったためトムスクからノボシビルスクまでは一人でバスに乗っていくことにしました。フライトは夜だったものの、ノボシビルスクまで 4 時間かかるのでカーチャともトムスクでお別れです。別れ惜しいものの、一度実際に会えたということは二人にとってとても大切なことでした。だからこそまた会おうと約束して私はバスに乗り込みました。さらばトムスク！

おわりに

連載記事「シベリアの愛」も今回で第 3 回そして最終章となりました。ネットのチャットサイトで出会ったロシア人女性に会うためにシベリア・トムスクまで行き、今まで知らなかったロシアの面白さを発見するという物語でした。「シベリアの愛」というタイトルながら、あまり詳しい恋愛話になる前に連載を終わります。端的に言えばこの頃からカーチャと正式に付き合い、翌年の夏には 1 カ月ほどトムスクに滞在しました。そのころには喧嘩もするようになり、顔面にスマホを投げられるなどの面白い事件も多々ありましたが、この連載では割愛させていただきました。正直、この後の話の方がタイトルにはピッタリなのですが、出会いから初のトムスク旅が私のロシア世界の扉を開いたきっかけでした。これがなければJIC で働いてこの記事を書くこともなかったでしょう。その他のストーリーはいずれ機会があるときに記事にしたいと思います！

最後にひとつ。コロナウイルスが流行し、自由に旅行できないこの期間で私のようにネットを通じてどこかの国の人と仲良くなり、パンデミック終息後に会う約束をしている人がいるかもしれません。恋仲のような間柄になれば尚更会いたい欲が強くなるでしょう。それでも忘れないでいただきたいのはネットで会う人はみんなが良い人とは限らないということです。私は今までに男女問わず多くの人とネット経由で会ってきて幸いにも悪い人はいませんでした。それでも詐欺や事件に巻き込まれるケースもありますのでしっかりと見極めて利用してください。

最後の最後でとてもまじめな感じになりましたが、コロナに負けずに頑張っていきましょう！ПОКА!（パカ）

「ロシア映画祭 in 東京」
ロシアへの愛を込めて～
♥＜繋がる＞ご縁 ＜最終章＞

田島　瑠采奈（映像プロデューサー）

～「人となりを知る！ことから繋がるご縁」～

2020 年は、激動の年となりましたが、皆様お元気でお過ごしでしょうか？

早いもので「第 3 回ロシア映画祭 in 東京」の開催からまもなく 1 年になろうとしています。残念ながら、今年「第 4 回目」の開催には至りませんが、来年に希望を託しつつ、本レポートも最終章となります。

まずは、「第 3 回ロシア映画祭 in 東京」にご来場頂きました皆様へ。アンケートに頂いたご質問ですが、会場での時間的な制約もあり、すべての質問にロシア側ゲストから回答を頂く事が出来なかったことをお詫びいたします。そこで本最終章では、ロシアゲストの皆様にフォーカスし、私が映画祭期間中に彼らから得た情報をスペースの許す限りお伝えして参ります。

本文に入る前に、本ロシア映画祭では、来日ゲストの皆様とご来場者様との交流に重きをおき、上映後に「Q&A」の場を積極的に設けてきました。（＊ちなみに他国で開催しているロシア映画祭は「Q&A」を行っておらず、ロシアゲストの皆様は、日本での上映を楽しみにして下さっている様です）。とは言え、各作品の上映時間と会場の使用時間制限との兼ね合いで、皆様のお声をゲストに届けられる人数にも限りがありました。そこでより多くの声を届けるべく、第二回目からは、デジタルアンケートを導入しました。多くの方々からの質問が、映画制作者たちの励みとなり、今後の作品創りでの貴重な意見になる！と喜んで頂けました。さらにこれらの「Q&A」は、日本での反応を伝えるロシア文化省への報告書の一部にもなり、次の開催へと繋った要因の一つともなりました。

第三回目では、「Q&A」の時間の中だけではお伝え出来ない！ゲストの皆様の「人となり」もお伝えする事が出来ないかと思い、各ゲストの皆様に上映前の数十分の時間を頂き、パーソナリティなお話しを伺う事と致しました。それは、映画作品に込められた想いが制作者の「人となり」を反映している事が往々にしてあり、それを知る事でさらに映画作品への理解も深まるからです。本ロシア映画祭の目的の一つには、映画を通してロシアという国を知って頂く事もあります。アンケート結果で分かった事は、ロシアに造詣の深い方と本映画祭で初めてロシアに触れた方とあり、作品の捉え方の格差をとても感じました。ロシアに触れた事のない方にとっては、「置いてきぼり感」を持たれることもあり、その格差を埋める事も運営側のお役目の一つかと思います。知識のある人もない人も楽しめる場を作る為には？と思案し、「知る」ことの幅を広げてお伝えする事としました。それが、「人となり」です。作品の解釈が難しくても、制作者のパーソナリティを知れば、親しみも湧きますし、その国への興味を持つ事にも繋がるからです。政治的外交的に壁はあっても、お互いを知り、理解する心が芽生えれば、相手を思いやる気持ちも生まれ、大きな壁も飛び越えていけるのでは？との想いもあったからです。

お話しの一部は、映画祭「Q&A」後にお伝えさせて頂きましたが、残り時間との兼ね合いでお伝え出来なかった内容もありますので、来日ゲストのパーソナルな話を「Q&A」スタイルで、ピックアップして書き進めていきたいと思います。

◇ゲスト：アレキサンドラ・ジューコワ
（ロシア映画祭プログラミングディレクター）

Q：上映作品の選定に関して？

A：作品選定は、各国で嗜好が異なる為、上映する国の方が好みそうな作品を選定しています。

Q：日本について？

A：『電車が好き！日本の地下鉄はカオスになっていないので、一人でも乗れるしすぐに分かる。

日本の歴史、寺、自然、日本の文化が大好き。日光はとても良かった。まだ京都に行けてないのでいつか必ず行きたい！そして、広島も自分の目で見てみたい！とても重要な場所だから。宮崎アニメも新海監督の「君の名は」も好きな作品。日本は色々な食べ物がある！回転すし、天ぷら、うどんの具がトッピング出来るところがとても楽しい。毎回、コンビニで水を買おうとすると、なぜかいつもフレバーを取ってしまう！（照れ笑い）』

今回で来日 3 回目となり、東京の地理にも詳しくなったようです。とても勉強熱心で、日本の皆様にどんな作品が喜んで頂けるのか？アンケートを参考にしながら考察しているそうです。

シャイなところもあって、ちょっぴり天然な可愛さもあり、とてもチャーミングでキュートな方です。次回来日の際には、彼女は英語も喋れますので、積極的に話しかけてあげて下さい。日本文化のお話しや観光案内もして差し上げたら、とても喜んで頂けると思います。

◇2019 年 12 月 12 日：【黒いガラス】
ゲスト：リュドミラ・レオンチェワ　プロデューサー

Q：作品に関して

A：『この作品でデビューした女優が映画祭で賞を頂き、撮影監督もロシアでとても有名な方で、特に雨のシーンは必見です。作品としても国内外で高い評価を頂きました。日本の観客の皆様には少々理解し難いストーリーかもしれませんが、皆様からの色々な視点からのご意見を頂けるのがとても楽しみです。監督も沢山の感想・意見が欲しいと言っていました。』

大変申し訳ありません。パーソナリティよりのインタビューは、毎回上映前に行うのですが、レオンチェワさんに関しては、初日の上映日に日本に到着したばかりで、作品以外の内容に関しては伺う事が出来ませんでした。とても誠実なお人柄で、当初来日予定のロプシャンスキー監督が体調不良で来日出来ず、ご自身が監督の代わりに日本の皆様にしっかりと作品を届けなけれ

ば…という、強い意思と気迫がひしひしと伝わってきました。Q＆Aではどんな質問にもお答えします！「ドントコイ！」というような(笑)バイタリティーのある素敵な方でした。そして、『黒いガラス』の日本での配給を強く望んでおられました。配給をご検討頂ける方がいらっしゃいましたら、お繋ぎ致しますのでお申し出くださいませ。

◇2019 年 12 月 13 日:【予想外の出来事】

ゲスト:アンドレイ・ムイシュキン監督

ムイシュキン監督は、今回は自身の作品のゲストとしてだけでなく、映画祭全体のテクニカルディレクターとしても活躍して下さいました。上映会場のテクニカルチェックの為、他ゲストの方々よりも一足早く来日されました。実はアンドレイ監督とは、来日早々の打合せで、公私共にお人柄を垣間見るお話しもさせて頂きましたので、シェアさせて頂きます。

恵比寿のカフェでの打合せでしたが、その際に監督は、“珈琲とモンブランケーキ”を注文しました。

A:『以前、付き合っていた彼女が珈琲ショップに勤めていて、珈琲のうんちくが凄くて、そのうちに自分も詳しくなった。今回、日本の美味しい珈琲の飲み比べをして帰りたい！』

そんな話をされました。この話を上映会場で紹介したら、お客様からお勧めのコーヒー店をアンケートの際に教えて頂き、お伝えしたらとても有難い！と喜んでいました。

モンブランケーキは、初めて食べたとの事で不思議な表情で食されていましたが…まぁまぁ美味しいとの事でした。愛妻のパンケーキはとっても美味しいそうです♥

アンドレイ・ムイシュキン監督とモンブランケーキ

そんなたわいもないお話しの後で、初対面でありながら斬り込んだ質問をさせて頂きました。

Q:「先月、東京国際映画祭のコンペ部門でウクライナの作品が上映され、Q&A の時に主演俳優の方が、ロシアとウクライナの社会情勢について話され、「ロシアはとても問題のある国なので、日本の皆さんもロシアには気を付けて下さい！」と話していましたが、このことについて同じ映画人としてどう思いますか？

A:『ロシアとウクライナの関係は、政治的な意味では問題あると思うが、民間レベルではまったく問題はない。現にウクライナの映画制作者に友達もいるし、とても仲良く協力関係を結んでいる。映画作品に込められた想いとか、映画を通して伝えたい事はとても良く分かるが、映画祭という公の場で、表現者として舞台に立つ者として、その一言が観客の皆様にどれだけの影響を与えるのかを想像してから発言して欲しいと思う。何も知らない人達は、全てのロシア人とウクライナ人が皆んな同じ考えを持っているかと勘違いしてしまう事にもなりかねない。発言にもっと自覚を持つべきなのでは…。』

この件は、シンポジウムの中でも触れていますので、そちらをご覧下さい。

ムイシュキン監督のお話しから、とても中立で骨太なものを持っている方だと思いました。上映期間中は、毎日ご一緒させて頂きましたが、誠実でとても温厚な他者への気遣いもできる優しいお人柄の方でした。作品にも現れていましたね。個人的にはとてもお気に入りの作品です。

◇2019 年 12 月 14 日:【俺たちには死が似合う】

ゲスト:ボリス・グッツ監督

アナスタシア・グセンツォワ　プロデューサー

Q:日本について？

A:グッツ監督:『日本に来るのを夢見ていました。若い頃に黒澤明監督の「七人の侍」、北野武監督の「座頭市」を観ていました。北野監督は特に興味深く、本物のアーティストだと思います。コメディアンの背景を持った人がドラマ映画を撮ると、とても面白い撮り方をする。自分もそう撮りたいと思いました。

自分は仏教徒なので、命に対して死に対しては、いつもよく考えている。来日してすぐに、47 人のサムライ(赤穂浪士)の墓に行き、増上寺にも行きました。

初めて日本にきました。自分の作品を日本の人々がどう感じるのか？ 特に日本人は、明るさ、嬉しさに関して、どういう反応をするのか？とても興味深い。嬉しさは心の中にあって、それをお互いにどう扱うのか？日本人の扱い方で、この映画をどう受け入れてもらえるか？それを知りたいと思います。

お寿司を食べました。モスクワのお寿司屋さんと違い、魚の味が本物でした(笑)

東京は、モスクワより人が多いが、とても清潔で気持ちがいいです。』

プロデューサーのグセンツォワさんは、「ロストイントランスレーション」の映画が大好きで、東京の街を歩いて、映画の中にいるのと同じ感覚になりました！と、話されました。

グッツ監督は、自身の体験から作品を構想されたとの事でした。その辛い時期にそばで支えたのが、グセンツォワさん。彼女にはとても感謝している！とおっしゃっていました。

仏教徒になったのも死と向き合う事になった事がきっかけだとのこと。とてもまじめな方で、「Q&A」で多くの方の質問を受けたいので、回答は短めにお願いしますと伝えたら本当に短くて、逆に答えがわかりにくくなってしまったようでした。(汗) 監督す

いません。

ピカチュウに関しては、幼い頃に人気だったので…と話され、とても申し訳なさそうな顔で苦笑いされていました。

リアリティを追求したiPhoneでの撮影は、演出的にとても活かされていましたね。本当に素晴らしい作品でした。精神的な世界に造詣が深い監督なので、今後の作品もとても楽しみです。

◇2019 年 12 月 15 日
【目を閉じれば見える】
ゲスト：ゲオルギー・サリニコフ監督

Q:作品について伝えたい事&日本について？

A:『この作品は、プロデューサー、俳優とも同級生で、人生の半分は友達という間柄の人達と創った作品です。監督である自分も出演しました。そのシーンは、TVモニターの中で流れるドラマの中です。これは 4 分間の映画ドラマとして、実際のドラマのパロディーを低予算で作りました。プロデューサーもおかしな警察官の役で出ています。撮影クルーとはとても仲良くて、ロケ中はある街の一軒家を借りて滞在しました。皆んなで一緒に家族のような暮らしをしていました。なので、撮影後には何組かのカップルが出来ました。とても喜ばしい事です。僕は、その時は既に婚約者がいたので、大丈夫(笑)。それぐらい、出演者もスタッフもみんなが一つになって創り上げた作品です。

この作品のテーマというべきは、主人公が盲目であるという事です。5 年前にプロデューサーと一緒に目の見えない演劇団を作りました。観客の皆さんにもアイマスクを付けてもらい、会場も真っ暗にして行うチャリティー演劇団です。ある時の公演で盲目の女性と舞台に出ました。稽古の時は僕が彼女をサポートしたのですが、本番になって暗転した途端に僕は彼女に助けられた。この経験が、映画のヒントに繋がったと思います。この演劇団は、ロシア国内ツアーもやり、孤児院にも行きました。

僕の人生のテーマは、盲目と孤児院です。だからといって、盲目というテーマを変に強調したくない！悪用する(ハンディを「売り」にする)ような事はしたくなかった。目が見える人と一緒。たとえ盲目でも人を助けられる。だが、ダイレクトな表現は安っぽくなるので扱い方にもこだわりました。

日本の印象は、…、今日着いたばかりなので、…、あっ、大江戸温泉に行きました。裸の日本を見ました(笑)。とても良かった。滞在中に鎌倉に行く予定。今回は無理ですが、いつか京都に行きたい。

ロシアでは、日本料理は大人気！僕はシンプルなロシア料理が好きで、スープ、パンが好き。ボルシチとか、ロシア料理が好き。奥さんは日本料理が大好き。彼女は幸せだと思います。

今回は、Q&Aでサプライズな答えを用意しています。それは、僕がロシア国立映画大学を卒業する時に北野武さんが学校にきました。とても嬉しくてサインをもらいました。その時に彼が言った言葉を日本語で覚えました。最後に皆さんの前で話します。その言葉は、

「成功者になるには、子ども時代を覚えている事と、ちょっと頭が狂っている！くらいでないといけない！」』

サリニコフ監督は、お会いした瞬間からとても明るくて親しみやすい方で、常に笑顔を絶やさない。お話しもとても流暢で、さすが俳優さん！と思いましたが、人生のビジョンを話し出した時の真剣な眼差しに、確固たる信念の強さを感じました。映画を創る事が全てではなく、社会といかに共存共栄していけるか！今後のサリニコフ監督の様々な場面での活躍が楽しみです。

撮影現場が本当に楽しかったというお話しから、作品を観たらその想いが伝わりますね。ラストは切ないですが、とても素敵な作品でした。

＊アンケートの中で、「上映後の Q&A でサリニコフ監督はまだ答えたかったようでしたが途中で閉められ残念でした。その後のシンポジウムまで相当時間あったのになぜ？」とありましたのでお答えします。シンポジウムの前の休憩時間は、日本側登壇者とロシアゲスト全員との顔合わせと打合せの時間に当てておりました。監督も参加しなければならず切り上げさせて頂きました。打合せには、20 名近くおりましたので、通訳の時間も交えると 40 分ではとても収まらない時間配分でした。案の定、時間オーバーしました。裏方事情もお伝えし、今後のご理解ご協力を願えましたら幸いです。

シンポジウムの控室で、ロシアゲストの皆さんの落書き

◇2019 年 12 月 16 日:【選択の権利～ヴェーラ編】
ゲスト:エカテリーナ・ウスチュゴーワ監督

Q:日本について？

A:『日本は大好き。来日できてとても嬉しいです。日本はおとぎの国！このような機会がないと来る事はなかったと思います。浅草寺と明治神宮に行きました。もみじの紅葉がとても綺麗で印象に残っています。昨夜食べた鍋料理がとても美味しかった！色々なものが入っているのが気に入りました。それから、珈琲館のカフェオレがとっても美味しかった。

浅草では、日本男性の髪が立っている人が多くて面白かった。ロシアと違って髪の薄い人が少なかった(笑)。今回、ナイトクラブに行きました。そこで踊っていたらナンパされて、送っていくと言われたので、一緒にタクシーに乗ったら違うホテルに連れていかれて…。でも、その人からタクシー代をもらって別のタクシーで帰りました。そんな体験をしました(笑)

日本で観たいものは、相撲、歌舞伎、ミュージカル。遠いところ、田舎町にも行ってみたい。京都とか、昔の日本を見たい。着物、芸者を見たい。日光江戸村の忍者もみたいです。』

ウスチュゴーワ監督の感性のアンテナがとても鋭くて、感想の視点も捉え方が個性的でした。

作品はソ連時代のお話しで、当時ロシア正教が禁止されていた1977年~1980年代のリアルストリーを題材に描かれた作品で

した。上映前に監督は、宗教を取り上げているので、日本の観客の皆さんに伝わるか？とても心配のようでした。

この日だけ、少々都心から離れている府中会場だったので、集客が心配でしたが、当日は多くの皆様に来場して頂きました。府中会場は、今回の上映場所の中では一番、上映設備が整った会場だったので、エカテリーナ監督は「こんな素晴らしい会場で上映してもらえて、私は本当にラッキーだわ！」と言ってとても喜んでいました。Q&A も活発に行われ、監督もとても充実した時間を過ごされて、ご満悦の様子でした。帰りの電車の中では、明日、歌舞伎を見る予定だと歌舞伎座の行き方を調べていました。どんな感想をお持ちになられたのでしょうか。女性監督ならではの視点と切り口の素晴らしい作品でした。

今後の監督の作品に歌舞伎がどのように活かされるのか！楽しみです。

＊毎回、来日ゲストの皆様には同じ質問をさせて頂いておりますが、お答えも千差万別で個性が現れますね。

◇2019 年 12 月 18 日：【深い河】

ゲスト：ウラジーミル・ビトコフ監督

アンケートより：18 日に開催されたウラジーミル・ビトコフ監督の映画上映後の質疑応答時間で、最後に司会者の方から紹介されたビトコフ監督の日本に対しての感想にとても心打たれました。もう一度聞きたいのでぜひ文章化して教えていただけないでしょうか。お願いします。

Q：日本について

A：『「恋に落ちた！」。神秘的でとてもファンタジーな国。昔から日本に興味を持っていて、日本に来る事を夢みていました。日本の樹木が本当に美しいし、緑が綺麗。今回は特にもみじが綺麗でした。盆栽を 14 歳からやっています。アレクサンドル・ソクーロフ監督の下で学んでいた時に、ソクーロフ監督と日本や日本人について色々な話しをしました。子供の頃から日本が好きでした。日本映画を観て（黒澤明監督の映画）、サムライ遊びもしました。

日本のもっとも印象に残っているのは、人々の行動文化です。それは、周りの人に対する尊敬、個人のスペースに対する尊敬、…など見たことのない！現象でした。日本映画を観ただけでは分からなかった事が、実際に日本に来てみることで、疑問点の回答を見つけたように思います。

ロシアに帰ってからまた、日本映画を見直して観たいと思います。』

ビトコフ監督は、とてもシャイな方で、話し方も優しく言葉少な目の温和な方でした。

長い髭が印象的でしたね。なぜ髭を？と伺うと、恥ずかしそうにはにかんで笑みを浮かべたその奥に、清々しい青年のイケメンな顔をのぞく事ができました（笑）

Q&A では、白熱した質疑応答となりました。皆さまの作品への関心や熱い想いが伝わって、とても良い Q&A になったとおっしゃっていました。とても才能のある監督なので、今後の作品が本当に楽しみです。是非、日本を舞台にした作品を創って頂きたいと切に思います。

＊限られた時間では、各自の質問時間も制限されてしまいますが、ロシアでは上映会後の Q&A で押し問答が続き、深く深く論じていく事が多いようです。次回のロシア映画祭では、「とことん Q&A の日」を一日ぐらいは設けても良いかも知れませんね。

以上、来日ゲストの皆様のパーソナリティなお話しを抜粋して掲載させて頂きました（12 月 14日上映の「ラスト・ボガトウィリ」と 17 日上映の「ハラフ・オディ」の製作関係者は来日していません）。

ゲストの皆様の「人となり」を少しでも感じて頂く事が出来ましたでしょうか？ 上映作品と共にゲストの皆さまを今一度、思い浮かべて頂けましたら幸いです。

そして、全作品の関係者が日本での公開を希望していらっしゃいました。配給に携わる方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡下さいませ。

最後に、前回ご紹介出来なかった陰の功労者、「ロシア映画祭 in 東京」運営代表の伏田昌義氏に感謝の意を伝えて、締めとさせて頂きます。ジェーアイシー旅行センター（株）の代表であり、国際親善交流センター副会長として 40 年もの間、ロシアをはじめとした国々の人と人との交流に尽力されています。思い起こせば第 1 回目の打合せの時に伏田さんに伺ったのは、「そもそもは、ロシアとの人的な交流をやりたくて、旅行社はその流れの中ではじめたもの」だと…。

その意味を本映画祭でまさに体現されていました。映画祭期間中は、設営に必要な重い道具一式をディバックに入れて背負って来て、受付に立ち、夜中まで事務作業を続け、日中の本来の業務もこなし、毎日自ら汗をかいて映画祭成功の為に尽力するお姿を拝見し、ビジネスを除外した本気の想いを感じました。色々と困難な状況にありながらも、第1回目から裏方でどっしりと構えた父親的な存在として、運営全般を支えて下さったからこそ、映画祭継続へと繋がったのだと思います。その功績に改めて敬意を表したいと思います。

映画祭は何のために、誰のために開催するのか？

そこには、地位や名誉や権威やそんな事は一切関係ありません。ビジネスとしてロシア映画祭を開催しているのではなく、文化を通したロシアと日本との真の意味での交流が目的であり、その想いを共に分かち合える方々が集まって、映画祭を運営して開催しています。同じ想いの仲間たちに対して敬意を持つ事も人として大切な事だと思います。

今後も、同じ想いで運営をサポートして下さる方々に集まって頂けましたら、本当に有難く嬉しく思います。

一緒にロシア映画祭を盛り上げていきましょう！！

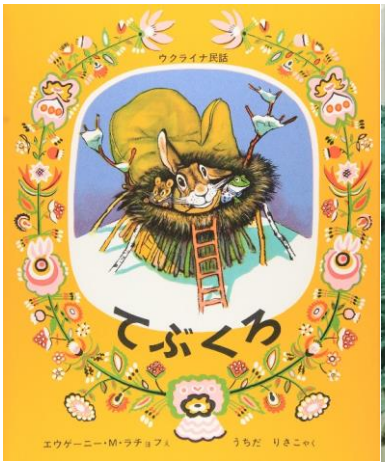
ここまでお読み下さり、誠にありがとうございました。

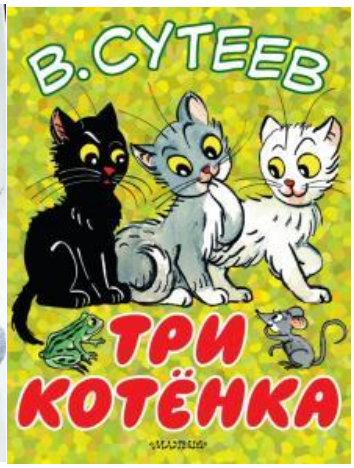
改めまして、ロシア映画祭にご来場頂きました皆様、運営スタッフ、ボランティアの方々、運営をサポートして下さいました全ての皆さまに心から厚く御礼申し上げます。

2021 年「第 4 回ロシア映画祭 in 東京」が開催されます事を願い、拙い司会ではございますが、また会場で皆様とお会い出来ます事を心より楽しみに致しております。会場では、お気軽にお声がけ下さいませ。皆様のお声をしっかりと受け止めて、次に繋げていきたいと思います。

末筆ながら、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り致します☆

ロシア映画祭 in 東京」実行委員会
田島瑠采奈（Riana TAJIMA）





大人も子どもも楽しめるロシアの絵本

稲塚　俊介（JIC 東京）

コロナウイルスによる影響で思うように外出もできず、家で過ごす時間が多くなった人がほとんどでしょう。外で友達と外食をしたり、ショッピングに出かけることができず息苦しさを感じるでしょうが、一方で普段やらなかったことにチャレンジする時間が生まれたというメリットもあります。皆さんも、料理、自宅トレーニング、家の掃除など各々様々なことに挑戦していると思います。

私に関しては今年 5 月に長男が誕生したこともあり、不慣れな育児に日々追われています。それでも仕事が在宅勤務のため“育休”のような雰囲気でこどもに接することができて嬉しいです。しかし折角時間があるので、私はこのコロナ期間で“ロシア語の絵本の読み聞かせ”を始めてみました。読者の方の中にもコロナ自粛のためお子さんに絵本を読んであげているという方もいるかもしれません。絵本と言えばこどもが読むものと思うでしょうが、大人になってからでも十分楽しめます。特に自分がこどもの頃に読んだ絵本を大人になってから改めて読み返してみると「とても奥が深いな」と感じる経験は恐らく多くの人が持っているでしょう。

「ロシアの絵本」となると馴染みがなさそうですが、実は日本にも数多くのロシアのお話が浸透しています。そこで今回は代表的なロシアのお話と最近私が読んだお気に入りの絵本を紹介いたします。

日本にも馴染みのあるロシアの絵本①

「おおきなかぶ」

この絵本を見たことがないという方はほとんどいないのではないでしょうか。おじいさんがカブを植えたが大きくなりすぎて一人では抜くことが出来ず、他の人の協力を得て引き抜くことに成功するというお話です。おばあさんや孫の助けをもってしても抜けず、犬や猫や鼠も加わるというのが可愛らしいですね。「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声を何度も繰り返すことで読み手と聞き手の一体感が生まれるのも名作たる所以なのでしょう。

しかし、みんなが知っているこの名作が実はロシア生まれだったことを知っている人はどれくらいいるでしょうか。ロシア語のタイトルは「Репка」（レープカ）と言い、「大きい」という形容詞はついていません。原作は 19 世紀後半に生まれており、今の私たちに馴染みのあるストーリーになったのはロシア人小説家アレクセイ・トルストイが編集してからです。イラストも日本人の佐藤忠良さんが描いているため、私たちが慣れ親しんだ絵本がそのままロシアの書店にあるわけではないですが、れっきとしたロシア生まれのお話です。

日本にも馴染みのあるロシアの絵本②

「てぶくろ」

この表紙をみて「懐かしいー！」と思う方もいるでしょう。しかし、よく表紙を見てみると一番上に「ウクライナ民話」と書かれていますね。今でこそ国境が確立してロシア、ウクライナ、ベラルーシ等に線引きされていますが、歴史を遡ればこの東ヨーロッパエリアの国々は幾度となく統合・分断を繰り返してきたため文化圏を明確に区切ることはできません。

この絵本について詳細を調べてみると、どうやら原作はロシア民話からきており、ロシア・ウクライナ・ベラルーシで合計 30 以上のバリエーションがあるそうです。基本的な話の構造は似ているものの、パターンとしてはハエが家を建ててそこに住人が増えていくものや、ポツンとある小さな家に

動物たちが集まってくるなど様々。そのため名称も様々ありますが、日本で知られている「てぶくろ」(Рукавичка)はウクライナバージョンです。

「おおきなかぶ」に共通して次々と色々な動物が現れてくることから、次はどうなるのだろうという期待が膨らんでいきます。明らかに途中から人数オーバーになりますが、それでもすでに「てぶくろ」に住んでいる動物たちは新しい仲間を受け入れていきます。異なる種族の動物でも素直に受け入れて共生する姿に深く考えさせられます。人間は自分たちのコミュニティーを形成すると殻に閉じこもる傾向がありますが、彼らのように寛大な心を持って他人を受け入れるようになっていければ人生はより豊かになるでしょう。

個人的に今ハマっているロシアの絵本

「3 匹のこねこ」

冒頭でも述べたように、ロシア語の絵本を読み聞かせることにしたのですが、長男はまだ生後 3 ヶ月のためなるべく簡単な絵本を読むことにしました。そこでチョイスしたのがウラジミール・ステーエフ(Владимир Сутеев)の作品です。彼は 1903 年にロシアで生まれ、作家・イラストレーター・アニメ制作など幅広い分野で活躍しました。日本では「こねずみとえんぴつ」という短編集絵本でステーエフの作品を楽しむことが出来ます。彼の作品の特徴は可愛らしい動物がたくさん登場し、彼らの姿が生き生きと描かれているところだと思います。数ある作品のなかで特に気に入った作品は「3 匹のこねこ」(Три Котенка)です。

この絵本の主役は黒・灰色・白の 3 匹のこねこです。彼らが小さな生き物を見つけて追いかけていくとその途中で様々なハプニングが起きます。こねこたちに追いかけられたネズミは小麦粉が入った大きな缶に逃げ込みます。それに続いて 3 匹のこねこもそこに飛び込むと全身が小麦粉で真っ白になり、そのすきにネズミには逃げられてしまいます。すると次はカエルを見つけて追いかけて今度は古い土管に入るとみんな真っ黒になってしまいます。そのまた次は魚を見つけて池に飛び込むとずぶ濡れになってしまいました。諦めて家に帰ると彼らの姿はすっかり元通りになっていました！どうやら家に着くまでの間に濡れていた体が乾いたようでした。

この作品も絵本ならではの次が気になる仕掛けが施されています。「次は何色になるのだろう」という予想をたてながら読むと更に面白さが増しますね。今はまだ息子に絵本を読んであげても大きなリアクションをとってくれませんが、めげずに続ければいつか物語を膨らませながら楽しめると信じています！今回ご紹介した絵本は地域の図書館やオンラインショップで手に取ることができます。皆さんも自粛で疲れ切った心と体をロシアの絵本で癒してみてはいかがでしょうか。

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

30 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 30 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,800 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学４月生・募集中

オンライン相談 受付中！

期間：2021年4月1日より10ヶ月

締切：２０２１ 年１月１５日

モスクワ国立大学 795,000 円(授業料 10 ヶ月)
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ国立大学 790,000 円(授業料 10 ヶ月)
ゲルツェン教育大学　744,000 円(授業料 10 ヶ月)
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東連邦大学 352,000 円(授業料 10 ヶ月)
ミンスク国立言語大学　344,000 円(授業料 10 ケ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆
ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。
東京事務所　平日 9:30-18:00　03-3355-7294
大阪デスク　平日 9:30-16:00　06-6944-2341
※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

◇◆編集後記◆◇

▼相変わらず新型コロナの先行きは不透明です。しかし、このまま「巣ごもり」しているわけにはいかないという意識が社会全体に出てきたような気がします。コロナ下でも日ロ交流を活性化させる取り組みが続いています。本号ではそれらを集めて、できるだけ賑やかに紹介してみました。▼昨年 12 月のロシア映画祭シンポジウムの報告集を本誌特別号(第 208 号)として発行しました。今は WEB 上のみに存在します。興味のある方は JIC のホームページから「JIC インフォメーション」を覗いて見てください。▼困難は続く。されど前進あるのみです。ともに頑張りましょう。(F)